

## P1-7 目標設定に難渋した事例 ～目標設定シートを用いて～

○金井塚 啓樹(OT), 柴田 八衣子(OT), 若林 秀昭(OT), 溝部 二十四(OT),  
森 直子(OT), 寺尾 貴子(OT)

兵庫県立リハビリテーション中央病院

Key word : 脳血管障害, 失語, 生活行為マネジメント

**【はじめに】**今回、左被殻出血による右片麻痺・失語を呈した事例を担当した。退院後は障害者支援施設(以下、施設)に入所し、その後独居生活を予定していたが、事例は訓練や今後の生活への目標設定が困難であった。そこで課題や目標を視覚化し、作業療法士(以下、OT)と共に具体的に必要な目標を考え訓練に参加できたため以下に報告する。尚発表に際し、症例と家族の同意を得ている。

**【事例紹介】**50歳代男性、診断名は左被殻出血、飲酒後右片麻痺症状出現。両親は協力的だが高齢であり独居予定。主訴は自分のことは自分で出来るようになりたい。

**【作業療法評価】**身体機能 Br.stage(R) 上肢Ⅱ, 手指Ⅰ, 下肢Ⅲ, 感覚は上下肢ともに表在・深部とも重度鈍麻。動的バランスは不安定。立位バランス不良で麻痺側の膝折れあり。高次脳機能運動性失語あり、簡単な指理解や単文レベルの文章理解は可能。表出は喚語困難あり。TMT: PartA 390秒, PartB 641秒, Kohs 立方体組み合わせ検査; 68/131点, 動作性 IQ84. ADL 食事自立, 移動見守り, 移乗・整容・更衣・排泄は軽介助, 入浴・歩行は中等度介助。

**【介入経過】**初回面接では事例は混沌として明確な意思表示は困難であった。前院で転倒歴があり移乗が不安定なためまずは移乗動作の獲得を目的に介入した。移乗訓練では、一連動作で手順の誤りが生じた。そこで、写真付きの手順書を作成し視覚化することで自立できた。また、下肢機能と立位バランスが向上し日中のトイレが自立した。しかし夜間の失禁は継続しオムツ内のパッド交換が必要であった。ADLの向上がみられた時期に事例と再度目標を確認した。事例は出来ることが増えたとは感じていたが目標を言語化することは困難であった。そこで、理解しやすいよう訓練経過を時系列で表し現状の課題を整理した。また、生活行為向上マネジメントシートの一部を目標設定シート

として用いて目標の共有を図った。結果、夜間失禁時のパッド交換と入浴時の洗体、入出槽が介助であることが課題として挙げられ、事例からはシートを見て「これなら分かりやすいね」との発言が聞かれ、自己評価は実行度1, 満足度1であった。目標達成に向け夜間失禁時の対応を看護師と連携し、パッドの選定と交換訓練を実施した。入浴は洗体タオルを作製し洗体動作訓練を実施した。結果、パッド交換と洗体は自立したが、入出槽と浴室内移動は自立には至らなかった。自己評価は実行度5, 満足度5へと変化した。入院から約4カ月後に施設へ入所となり入所前には施設のOTへこれまでの訓練経過、今後の目標と有効であった関わり方について申し送りを行った。

**【最終評価】**身体機能 Br.stage(R) 手指Ⅱ, 下肢Ⅳ。座位は、動的バランスが向上。立位は、中間位でも支持物なく保持可能。高次脳機能表出は喚語困難あるが改善傾向。理解は複雑な文章は困難だが、聴覚理解改善。Kohs 立方体組み合わせ検査; 115/131点, 動作性 IQ108. ADL 移乗・更衣・整容・排泄・入浴の洗体動作自立。入浴の移動・入出槽は介助。移動は車いす自立。歩行は短下肢装具と T 字杖で軽介助。

**【考察】**入院初期は、事例は現状の整理がつかず目標設定が困難な心身状態だったと考えられる。また、失語もあり自分の意志を伝えきれずにいた。そこでまずは身体機能に直接的アプローチで機能改善を試み、改善が得られた時期に目標設定シートを導入したことで、具体的な目標を考えられたと思われる。目標設定シートは言語表出の代償手段であり、事例の言語能力に対しては目標の表出に効果的であったと考える。また、今後事例は介護保険サービスの利用や両親など周囲の協力を得ながら生活を送る事が想定される。他職種連携において、入院中の有効な関わりを申し送ることで対象者が次の場で活動しやすい環境を提供できると考える。